慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	玉篇の研究(岡井愼吾著, 東洋文庫論叢第十九)
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.164(342)- 165(343)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

赤水の殊に力を注ぎたるは日本初め諸國地圖の刊行、地理志の編纂であり、その爲に廣く日本國内を行脚し、磁針器を持つて親しく地形を實測した。明和二年水戸の船頭が安南に漂着し、支那船により長崎に回送せられるや水戸藩の使者として長崎まで出向き、歸途下の關に於て八日間逗留せし間船頭の口供に基き「安南漂流記二卷」と漂流海上圖とを殘してをる。漂流記の研究は近時諸學者の注意を惹く所となり、殊に最近同種類の「南漂記」の佛譯が極東學院年報に出版されんとする折柄赤水傳の本邦に於て公刊せられしことは奇緣と云はねばならぬ。

地理學者としての赤水の位置は世間周知の事實であるが、今一つ赤水の忘るべからざる功績は民政に對するその建策である。此方面に於ける赤水の事蹟は從來充分認められざりし所であつたが本書によつてその重要性の一端は顯示されたと云つてよい。とにかく本書は近世日本の生んだ稀有の人物たる赤水の科學者として經世家としてまた儒者としての一生を極めて確實な典據によつて紹介したものであり、興味津々一讀卷を置くあたはざらしめるものがある。予は本書を廣く江湖に薦めると共に願くば著者が今後一層自愛して赤水の研究を續行され、年譜、著作目錄、索引等を添へてより完全な赤水傳を學界に提供されんことを衷心より希望するものである。なほ本塾助教授今宮新君は本著者の御令甥に當られることを一言つけ加へて置く。（松本信廣）

玉篇の研究（岡井愼吾著　東洋文庫論叢第十九）

漢土の書の彼地に於て既に亡び、我國に渡來したもの惟り存するの例は少しとしないが、玉篇も亦その一である。著者こゝに感ずる所あつて、玉篇にかんする一切の研究を網羅し、四六版六〇八頁の大册をなしたものが本書であり、著者の學位論文である。

本書は前篇と後篇とに分れ、前篇は又玉篇考正篇—顧野王及び原本玉篇と、續篇—顧氏の舊に非ざる玉篇とに分たれてゐる。その概略を記するに、著者は先づ玉篇に關する和漢の記載を擧げ、次いで南朝の梁・陳二朝に仕へた著者顧野王の傳記を述べ、玉篇の卷數は三十、述作の年月の正確なことは不明であるが、顧の時代は字書の著作の衰へた時代であり、且北方にのみ學問の榮えた時代であるから、時代的地理的に見て破天荒の著作であるとし、原文の我國に現存するは、その卷八、九、十八（後部）、十九、二十二、二十四、二十七の七卷であるとしてをる。次ぎに玉篇の體貌として、收字の範圍は一萬六千九百十七字とし、その數の多きは玉篇特有の「或爲」によるとし、音切は忠實に當時の標準音を出し、訓義も古書の用例を廣く採り、解釋斬新にして、しかもよく當るとし、口を極めて之を賞揚し、その他書に勝れることを力說し、而して之を說文・字林等と比較するに、前者に依ること極めて多きも、字林よりは何等引いてゐないとしてゐる。

以上が正篇であり玉篇の大體の輪廓であるが、續篇に於ては、その後唐の上元年間に孫强が增字したが今傳はらず、宋の大中祥符年間陳彭年等が大廣益會玉篇を刊定し、以後原本は支那に於て全く亡び、惟りこの大廣益會本系のものが流通したとし、宋本三種、元本十二種、明本十一種、清本四種、及び本朝刊本十二種を

舉げ、一々精細に研究し解說し、その系統を調査し、內容を比較して居り、更に我國でつくられた倭玉篇四十數種を舉げて、玉篇の我國に及ぼせる影響の大なるを示し、半島の地に刊行せられた韻會玉篇及び全韻玉篇、耶蘇會士によつて作られた小玉篇にまで言及してゐる。

後篇には玉篇逸文として、顧氏の原本のと思はれるもの一千七百九十一字、原本と趣を異にするもの三百四十九字、合計二千一百四十字が蒐錄されて居り、此の爲に涉獵した書は我國に於て二十五種、禹域のもの十二種、その字數は實に原本の八分の一に及んでゐるのである。

尙卷首に圖版二十（之に收められた諸本二十一）、卷末に前篇に論及せし文字及び重要なる事項の索引と、後篇たる玉篇逸文の索引とが附せられてゐる。

以上の如く本書は頗る該備であつて、之を一讀する者何人も著者が多年の努力に叩頭せざるを得まい。その僻遠の地に於て、多大の不便を忍びつゝなされたにも拘はらず、本書は堂々書籍研究の一範例として吾人に敎ふる所實に多大なるものがあるのである。（杉本忠）

史的言語學に於ける比較の方法

（アントワヌ・メイエ著　泉井久之助譯・政經書院版）

比較言語學に於けるメイエ敎授の位置に就ては呶呶を要しない。本書は敎授がオスロに設立された比較文化研究所開所記念講演に於てなした La méthode comparative en linguistique historique, 1925 を譯したものである。日本に於けるメイエ氏の紹介としては從來田邊壽利氏が De la méthode dans les sciences, 1911 中メイエ氏執筆にかゝる Linguistique の項目を「科學研究法」中に言語學として譯し、また最近國語科學講座中に「言語社會學」としてメイエ氏の斯學に於ける寄與を述べてをる位で未だ此の碩學の學風を傳へるに甚だ吝なるものがある。幸ひ泉井氏によつてメイエ氏著作中比較的はいり易い本書が先づ飜譯せられたことは吾人の欣快に堪えぬ所である。一體我國に於て佛國派言語學は多く傍系の學者によつて紹介せられてをりその本流が誤り解せられてをる嫌ひがある。たまたまソッシュールの本が譯されてをるため同人が今なほ重要な立役者の如く解せられたり、スキスのバイイ氏の著が紹介せられ、之が佛國言語學の代表である如く考へられたり甚だ遺憾な點が多い。泉井氏の譯著は此點に於て時宜に投ずるものである。聞く所によれば氏は更にメイエ氏の「印歐諸語比較研究序說」譯出の途上にあられるとか、同氏の精勵によりメイエ氏の精緻なる學風が日本に移殖せらるれば之によつて本邦學界の啓發される所極めて大であらう。世界の學會に於て殆ど未知なる分野を國の四周にめぐらして我國學界はあまりに徒手傍觀に過ぎた嫌ひがある。一體我國に於て言語學は著しく跛行的發展を遂げてをる。殊に我が東洋學に於て今少し言語學をとりいれる必要があらう。かの十九世紀代の比較言語學的方法などを今なほ言語學の眞面目なる如く考へ漫然言語學の輕重を問ふ人人はメイエ氏の著書によつて反省する必要があらう。もとより本